



TITLE:

コラボ総括円卓会議: 学校改善ユニットの活動 -高倉小学校、プロジェクトTKにおける取組み-

AUTHOR(S):

大下, 卓司

---

CITATION:

大下, 卓司. コラボ総括円卓会議: 学校改善ユニットの活動 -高倉小学校、プロジェクトTKにおける取組み-. 子どもの生命性と有能性を育てる教育・研究をめざして 2012, 活動報告書(2007-2011年度): 27-27

ISSUE DATE:

2012-03-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/179749>

RIGHT:

## 学校改善ユニットの活動 — 高倉小学校、プロジェクトTKにおける取組み —

### 1. 京都市立高倉小学校との共同授業研究に関する報告

学校改善ユニットの1つである京都市立高倉小学校（以下、高倉小学校）における共同授業研究について、教育方法学研究室の天下卓司（博士2回生）が報告した。報告の概要は、次のとおりである。①共同授業研究「プロジェクトTK」の歩み、②高倉小学校とはどのような小学校か、③プロジェクトTKの目的、④プロジェクトTKの方法（1年の流れ）、⑤今年度の取組み、である。以下、概要を説明する。

同プロジェクトは2003年に始まり、2007年に教育実践コラボレーション・センター（以下センター）が設立され、学校改善ユニットの1つに位置付けられることになった。センターのホームページには次のように紹介されている。「京都市高倉小学校をフィールドとして、教師の授業力を高めるとともに、教員と大学院生が、授業の計画、授業の観察、授業の振り返りを、教師とともにやってきた。それは、確かな学力を育成するためである」。また、9年間を通算して「すでに500回以上」学校に行き、日常的に授業観察を行っている。「教師の力量形成、生徒の学力向上のみならず、将来大学機関で教員養成にかかわる大学院生の力量形成にも寄与することが現実に期待できる」。このような歩みの中で同プロジェクトは進められている。

フィールドとなる高倉小学校は、1995年に5つの学校が統合されて開校した。京都市の中心部に位置し、校区は番組小学校の伝統を引き継ぎ、120年以上の歴史と伝統がある。現在は、御所南小学校、御池中学校との小中一貫コミュニティスクールに取り組んでいる。加えて、地域との連携が推進されている。

このような小学校と「子どもが育つ、教師が育つ、院生が育つ」というこの3つの育ちをキーワードに研究を進めている。「子どもが育つ」という共通の目標に向かって、教師と大学院生が共に授業を通じて協力することを目的としている。1年間を1サイクルとして、学校の研究に則して、授業を軸にした共同研究に取り組んでいる。本年度は、子どもの学習の深まりを正確に評価する上で有効なパフォーマンス評価論を取り入れた授業づくりに焦点を当て、テストでは見ることができない、子どもの多様な表現を評価し、授業改善に活かす研究を行っている。

### 2. 高倉小学校からのコメント

以上の報告に対し、高倉小学校から出席した、林正幸校長、門田真澄教頭、日下部範子研究主任は次のようにコメントを行った。

共同授業研究は既に9年目を迎え軌道に乗っている。教師は日々の実践に迫られるため、実践を裏付ける理論がほしいと考える。大学院生は、理論はあるが、現場での実態や有効性を知りたいと考える。この関係性

の中で、子どもの育ちを共通の目標に共同授業研究が続けられてきた。共同研究では授業研究に焦点があてられるが、大学院生は平素からも授業に関わり、教師と学級の話などができており、深い関係にある。今後も高倉小学校としても続けていきたい取り組みである。もともと、この共同研究はセンターの立ち上げ以前から行われていたが、立ち上げとともにセンターのユニットの1つになったことで、より充実した連携が始まったのではないかと考えられる。これまでの九年間で、学校の研究組織も変化してきた。大学院生はその変化にも臨機応変に対応し、共に研究を進めてきた。

こうした変化がある中で、共通して行なわれてきたのが、教材研究と授業観察だった。これは、子どもがよりよく学ぶようなよい授業をしたいという想いを実現する努力とも合致している。教材研究は、確かに教師も行っている。しかし、日々の授業実践や目の前の子どもたちへの対応に追われがちで十分に行えていない場合もある。そのような中で、大学院生が専門的な知識や様々な教材を紹介し、それを受けて教師が子どもの実態に即して理解して、自分の授業を振り返ることで、よりよい授業を模索するきっかけにある。また、既に行った授業でも、理論的な意味づけを得ることで、授業を再考するきっかけになる。

授業観察に関して、学級には約40名の子どもがいるため、教師は子どもの学習のすべてを把握することは難しい。子どもの立場に立った時、必ずしも教師が意図したとおりに学習が行われていない場合もある。その中で、大学院生が、教師が把握しきれなかった子どもの様々な発言や姿を観察し、フィードバックを行うことで、授業を振り返り、次に活用するきっかけにもなる。子どもの学習に対して、正確な評価ができれば、指導に生かすことも可能になる。その点で、大学院生が子どもたちの学習を見取ること、そしてそれをフィードバックすることが私たち教師にとって、授業改善につながる。

今年度は、パフォーマンス課題を算数科部会の中で取り組んでいる。部会全体としての取り組みとしては始めたばかりで、経験不足もあるが、田中耕治教授を始め、西岡加名恵准教授、大学院生の方々にも教えてもらいながら、試行錯誤している。

### 3. まとめ

以上見てきたように、プロジェクトTKは教育方法学研究室と高倉小学校の双方にとって互恵的な研究となっている。センターは今年度で一つの区切りを迎える。しかしながら、総括の場で双方が研究の継続を希望しており、また、子どもの生命性と有能性を育てるというセンターの理念を引き継ぐ研究であるため、今後も共同授業研究を継続していきたいと考えている。

（文責：天下 卓司）